

ヴェルディ：歌劇「運命の力」序曲

「椿姫」や「アイダ」などで有名な19世紀イタリアの作曲家、ジュゼッペ・ヴェルディ（1813-1901）は、オペラの登場人物の性格や心理を巧みな手法で描き出し、音楽とドラマ（劇）の一体化を実現した。1862年、ペテルブルクで初演された「運命の力」は、そんなヴェルディの悲劇的オペラの代表作である。相思相愛のレオノーラとドン・アルヴァーロ、そしてレオノーラの兄ドン・カルロらが、皆懸命に生きようとしながらも、抗しがたい運命の力によって悲劇の終幕へと向かっていく。有名な「序曲」は劇中の音楽に基づくもので、運命に翻弄される人間たちの苦悩や葛藤を暗示する。

楽器編成：ピッコロ、フルート、オーボエ 2、クラリネット 2、ファゴット 2、ホルン 4、トランペット 2、トロンボーン 3、チンバツソ、ティンパニ、バスドラム、ハープ 2、弦五部 ※スコア上の表記

ハチャトゥリアン：バレエ音楽「ガイーン」より

“剣の舞” “ばらの乙女たちの踊り” “レスギンカ”

アラム・ハチャトゥリアン（1903-1978）は、ソヴィエト時代のロシア〔彼が生まれたトビリシ郊外は現ジョージア（グルジア）領〕の作曲家で、両親は同じコーカサス地方のアルメニア出身だった。1942年にロシアのペルミで初演されたバレエ「ガイーン」は、アルメニア国境地帯のkolhoz（集団農場）を舞台とした、民族色豊かな作品である。農場で働くガイーンが夫とその仲間たちを「人民の敵」として告発し、命を狙われるが、ロシアの国境警備隊員の愛によって救われ、最後はロシア人、アルメニア人、クルド人らがともに踊り、民族が融和する。（1957年にモスクワで初演された改訂版ではストーリーが変えられた。）“剣の舞”はクルド人たちの出陣の踊り。途中、サクスがクルド人の娘の妖艶な主題を奏する。“ばらの乙女たちの踊り”は結婚式の踊り。“レスギンカ”はコーカサスの山岳民族の熱狂的な踊り。

楽器編成：ピッコロ、フルート 2、オーボエ 2、イングリッシュホルン、クラリネット 2、バス・クラリネット、ファゴット 2、アルト・サクソフォン、ホルン 4、トランペット 3、トロンボーン 3、チューバ、ピアノ、ティンパニ、スネアドラム、バスドラム、シロフォン、グロッケンシュピール、シンバル、ウッドブロック、弦五部 ※スコア上の表記

ビゼー「アルルの女」第2組曲

19世紀フランスの作曲家、ジョルジュ・ビゼー（1838-1875）の「アルルの女」は、L.ドーデの戯曲のために書かれた音楽である。アルルの女に激しい恋をした青年フレデリが、裏切られて絶望するが、心配する家族を思いやり、幼なじみと婚約して生きる希望を見出そうとする。だが、婚約の日の夜、耕作祭を祝うファランドールを夢中で踊った後、彼は納屋から飛び降りて自らの命を立つ。この劇音楽をもとにビゼー自身が演奏会用の組曲を編んでいるが、彼の死後、作曲家仲間のエルネスト・

ギローが「第2組曲」として4曲を追加した。

第1曲「パストラル」は、第2幕の冒頭、湖のほとりで苦悩するフレデリをおおらかに包み込むような、牧歌的な音楽である。第2曲「間奏曲」は、フレデリが幼なじみヴィヴェットの愛を受け入れるまでの葛藤を描いた第2幕第2場を導く音楽で、木管と弦のユニゾンによる決然とした主題の間に、アルト・サクソフォンが優美な旋律を奏でる。第3曲「メヌエット」はビゼーの歌劇「美しいパースの娘」から転用されたもので、フルートとハーブの二重奏が主役となる。第4曲「ファランドール」は、第3幕、フレデリが命を絶つ前に踊るファランドールの熱気に満ちた音楽。途中から、劇の前奏曲に用いられた勇壮な「王の行進」の主題と組み合わせられて熱狂的に盛り上がる。

楽器編成：フルート2（ピッコロ持ち替え1）、オーボエ2（イングリッシュホルン持ち替え1）、クラリネット2、ファゴット2、アルト・サクソフォン、ホルン4、コルネット2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、シンバル、バスターム、プロヴァンス太鼓、ハーブ、弦五部 ※スコア上の表記

リスト：交響詩「レ・プレリュード（前奏曲）」S.97

フランツ・リスト（1811-1886）は、パリを本拠にピアノのヴィルトゥオーゾとして活躍した後、30歳代後半でドイツのワイマールの宮廷楽長となり、この時期から交響詩の作曲を始めた。交響詩はリストが創始したオーケストラ曲のジャンルで、音楽と文学、絵画、歴史などが結びついた標題音楽である。1854年に完成された「レ・プレリュード」は、フランスのロマン派詩人、ラルティエヌの『瞑想詩集』の一節に感銘を受けて作曲された。我々の一生は、生の第一歩が踏み出された時から始まる死への前奏曲であり、人は愛を知り、傷つき、田園で心を癒すが、再び挑戦する、といった深い内容の詩で、音楽もそれをなぞりながら展開される。なお、リストはこの交響詩に、未出版の合唱曲「四大元素」から主題を転用している。

楽器編成：フルート3（ピッコロ持ち替え1）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、スネアドラム、バスターム、シンバル、ハーブ、弦五部 ※スコア上の表記

ムソルグスキー：歌劇「ホヴァンシチナ」前奏曲“モスクワ川の夜明け”

19世紀後半のロシアでは、ヨーロッパ文化の影響から脱却した新しいロシアの文化、芸術を確立しようとする機運が高まり、音楽史の上では1867年にバラキレフ、キュイ、ムソルグスキー、リムスキー・コルサコフ、ボロディンをメンバーとする「力強い一団」、後の「五人組」が登場した。彼らはロシアの歴史や伝説などを題材にしたり、民族音楽の要素を取り入れたりしながら国民的な音楽を創出した。その一人、モデスト・ムソルグスキー（1839-1881）の歌劇「ホヴァンシチナ」は、17世紀末の皇位継承をめぐるホヴァンスキー父子の反乱を題材に、権力者たちと民衆の葛藤を描いた壮大な歴史劇である。第1幕の前奏曲“モスクワ川の夜明け”は特に有名で、木管が奏でる鳥の声をまじえながら、ロシアの夜明けの情景が描かれる。

楽器編成：フルート 2、オーボエ 2、クラリネット 2、ファゴット 2、ホルン 4、ティンパニ、バスドラム、
ハープ、弦五部 ※スコア上の表記

チャイコフスキー：荘厳序曲「1812 年」Op.49

1812 年 3 月、大軍を率いてロシアに遠征した将軍ナポレオンは、8 月にモスクワを占領しながらも、冬将軍の到来により寒さと飢えに悩まされ、ついに退却した。ロシアにとって歴史的なこの勝利を題材にしたのが、ピョートル・チャイコフスキー（1840-1893）の荘厳序曲「1812 年」である。曲は 1882 年、モスクワで初演された。全体は 3 つの部分からなり、第 1 部「ラルゴ」ではロシア正教の聖歌が、第 2 部「アンダンテ」に続き、第 3 部「アレグロ・ジスト」ではフランス国歌「ラ・マルセイエーズ」、ロシア民謡、ロシア帝国国歌がそれぞれ引用されている。最後は勝利の喜びが圧倒的なクライマックスを築き上げる。

遠山菜穂美

楽器編成：ピッコロ、フルート 2、オーボエ 2、イングリッシュホルン、クラリネット 2、ファゴット 2、ホルン 4、コルネット 2、トランペット 2、トロンボーン 3、
チューバ、ティンパニ、トライアングル、タンブリン、スネアドラム、バスドラム、シンバル、鐘、弦五部
※スコア上の表記

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。